

# 木更津市花山遺跡出土の鉄製口琴について

渡辺清志

**要旨** 発掘出土品としての口琴は国内ではいずれも埼玉県内出土の3例が知られていたが、千葉県木更津市花山遺跡出土のものを4例目として報告する。花山遺跡出土の口琴は平安時代(9世紀後半)のものとされ、これまで国内で発見された4例中最も古い。これら平安時代の出土口琴は①非常に大型である、②口琴の発音原理を熟知していたとみられる一方、それと矛盾する点もみられる、③枠の環状部と腕部を明瞭に意識して成形している、といった特徴を備えており、それについて簡単ながら考察を試みた。今後、さらなる類例の増加が見込まれるため、他の金属製品から口琴を識別するうえでの着目点を挙げ、注意喚起した。

発掘出土品としての口琴は、これまで日本国内で3例が知られている。1989年に大宮市(現さいたま市)氷川神社東遺跡から出土した2例と、2011年に羽生市屋敷裏遺跡から出土した1例である。

いずれも平安時代の遺構からの出土で、前者は10世紀前半、後者は10世紀初頭のものとされている。

2019年の早春、君津郡市の発掘調査報告書に口琴らしきものが掲載されている旨を、当事業団の田中広明氏から知らされた。同年2月15日、木更津市教育委員会で資料を実見し、当該の遺物が確かに金属口琴であることを確認した。

2020年1月17日、修復および保存処理のために株式会社東都文化財保存研究所に託されていた口琴の図化を行い、木更津市教育委員会の了承のうえでここに資料報告を行い、既報告の発掘口琴との比較検討を行うものである。

問題の口琴は1982年度に木更津市花山遺跡から出土した。木更津市教育委員会の公式見解では、口琴の時期は9世紀後半であり、現在のところ日本最古の口琴ということになる。

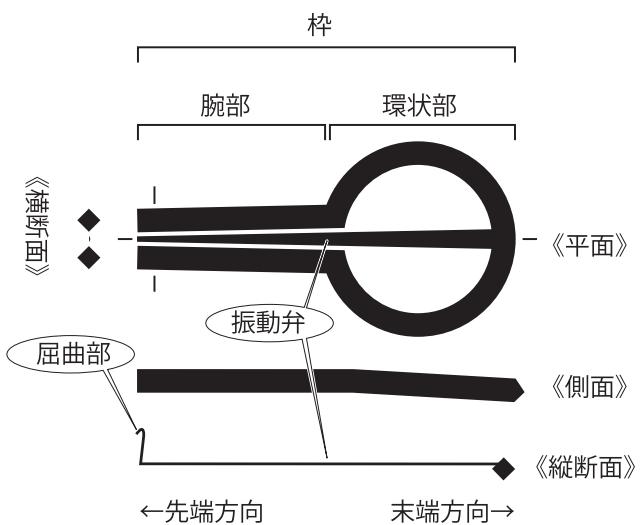
この口琴については同教育委員会でも2019年度中に再報告を予定しているとのことであり、

出土状況等の詳細については同報告を待ちたい。

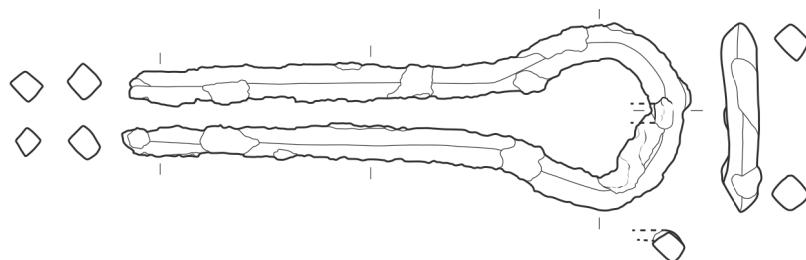
第2図1が木更津市花山遺跡出土の口琴である。鉄製の角棒を湾曲させた枠に、同じく鉄製で薄板状の振動弁を後付けしたもので、直川礼緒氏の分類に従えば「湾曲状口琴」にあたる(直川2015等)。本稿における口琴各部の名称は第1図を参照されたい。

全長14.8cm、最大幅4.9cm、高さ1.1cm。枠の厚さは環状部および腕部の根本で最大9mm、先端部付近で8mmである。腕部の間隔は、演奏に最も密接に関わる先端部付近で最小6mmである。重量は65.72gである。

枠の平面形は、環状部と腕部が比較的スムーズ

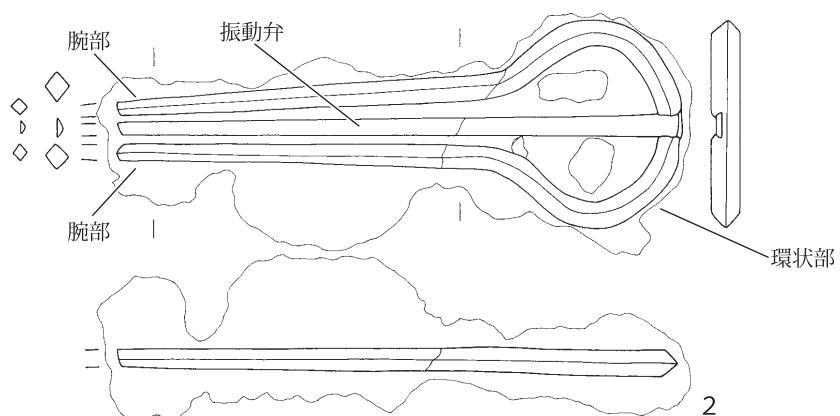


第1図 本稿における口琴各部の呼称



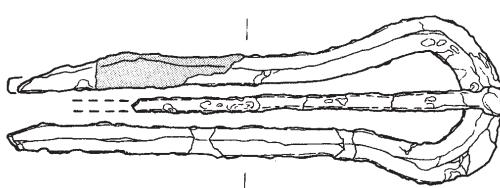
花山遺跡出土 口琴（9 C 後半）

1

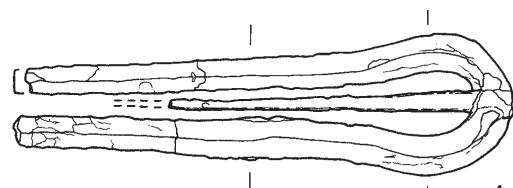


屋敷裏遺跡 第45号住居跡出土 口琴（10 C 初頭）

2



水川神社東遺跡 第1号口琴（10 C 前半）



水川神社東遺跡 第2号口琴（10 C 前半）

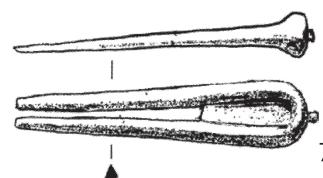


ロシア沿海州  
アンドリエアノフ居留地（5～6 C）

5



ロシア ケメロヴォ州  
エサウルスキイ古墳群（7～8 C）



ロシア 沿海州  
ニコラエフカ - I 土塚（9 C）

0 10cm 1:2

第2図 花山遺跡出土口琴およびアジア出土口琴との比較

に推移しており、これまで国内で発見された3例との比較の上では屋敷裏遺跡出土口琴(第2図2)と氷川神社東遺跡第1号口琴(第2図3)の中間形態といえる。枠が比較的太く、根本と先端部の差が小さい点では氷川神社東遺跡のものに近い。

枠の断面はいびつな正方形で、対角線を水平方向に向けるようにして成形されている。振動弁は欠失しているが、環状部末端表面にその痕跡を見る事ができる。この、枠の内側の角=エッジの間を本来存在していた振動弁の両側縁の角が高速で往復することで発生した虫の羽音のような小さな音を、演奏者の口腔内で共鳴・増幅させて様々な音色をつくり出すことになる。

枠への振動弁の取り付け方法は不明であるが、弁の接続部分においても枠の内面のエッジが観察できることから、ホゾ切り等の加工が腕部断面の中心にまで及んでおらず、比較的高い位置で振動弁が固定されていることがわかる。

口琴が大きな音を鳴らすためには、腕部内側のエッジと振動弁の両側縁が同じ高さでとなり合っている必要がある。環状部と腕部の境界部分を側面から観察すると、一直線ではなくごくゆるやかなクランク状ないし「へ」の字状に湾曲しているのがわかる。こうした加工を施すことで、環状部においては高い位置にある振動弁が、腕部の尖端ではその中心、両腕部のエッジの間を通り抜けているものとみられる。

ここで、花山遺跡出土口琴(以下、花山口琴)の特徴とその問題点をまとめてみたい。

①：この口琴の最大の特徴として、非常に大型であることが挙げられる。これは国内出土の3点の口琴とも共通しており、大陸側で出土する発掘口琴はもちろんのこと、世界各地に存在する現行品と比較してもひときわ巨大である。

②：枠の側面にみられる「へ」の字状の成形については、第2図2にも共通してみられる特徴であり、これらの楽器の製作者が口琴の発音原理を熟

知していたことがうかがわれる。

一方で、2本の腕部の間隔が6mmと比較的広く開いている点には注意すべきである。他の3本の国内出土口琴には振動弁が残存するが、例えば屋敷裏口琴では2mm～3mm近くも間隔が開いている。地中での腐食がこの点にどの程度影響をあたえるのかは不明だが、腕と弁を「点」で隣接させるために振動弁の側縁を刃物状に加工するほどの拘りぶりとは矛盾を感じざるを得ない。

③：枠の環状部と腕部を明瞭に意識して成形している。第2図5～7に、これまで大陸で出土した5～9世紀の口琴を挙げたが、いずれも明瞭な環状部を持たない「ヘアピン型」のプロポーションである。これに対し、国内出土のものは第2図4を除けば環状部を意識した「鍵穴型」をしている。

まず、①の「大きさ」についてだが、これまで国内で発見された3例との比較をしてみよう。全長はそれぞれ、

屋敷裏口琴=14.8cm

氷川神社東第1号口琴=12.8cm

同 第2号口琴=12.4cm

特に屋敷裏口琴とは(全長だけ見れば)ミリ単位で一致しており、なんらかの規格性すら想定させる。大陸出土のものがいずれも10cmに満たないことから、口琴が日本国内に持ち込まれてから大型化したことが考えられる。

大型化のきっかけとしては、音色や奏法に関わる嗜好の違いや、製作者・生産体制の違いが想定される。国内における口琴の製作が、たとえば農具やある種の武具・馬具など大型鉄製品の製作者の副業として担われていた場合、口琴自体が大型化していくこと、逆にそのことが奏法や音色の嗜好に影響をあたえることは十分に考えられるのではないか。

②の構造上の矛盾については、両腕を握り込んで距離を調整する、あるいは木製の枠、革・布製のベルト等で締め付けて補正する等の解決策が考

えられる。

但し、「今日的には大きな音でなくても当時は十分に満足していた」可能性も考えておきたい。弥生～古墳時代の出土琴のうち共鳴胴を持たない板状のものは、単体では決して大きな音はしなかつたはずであるし、ギターや鍵盤楽器など、近代に入ってから「大きな音」を求めていちじるしく大型化したり構造を変化させた楽器は決して珍しくない。

③の環状部については、現行の口琴の多くが持っているものであり、日本国内における固有の変化とは考え難く、多様な「黎明期口琴」のバリエーションのなかに「ヘアピン型」・「鍵穴型」が併存していた可能性が高い。大陸側での類例の増加を待ちたい。

現在のところ口琴の出土遺跡は関東地方に偏在しているが、そのルーツが北アジア、特に9～10世紀当時日本と交易のあった渤海国に存在する蓋然性が最も高いように思われる。近い将来、遣渤海使の寄港地である日本海側の山陰～北陸地域から発見の報がもたらされるかもしれない。

最後に、他の鉄製品から口琴を識別する際の着目点を挙げ、注意喚起をして結びに替えたい。

**A:金属（鉄）製で、ある程度の太さがある「枠」と細長い「振動弁」で構成されていること**

#### 引用・参考文献

可児弘明 1965 「びやほんノート」『史学』38－2 三田史学会

直川礼緒 2015 「アジアの発掘口琴チェックリスト（1）：薄板状の口琴（1）」『伝統と創造』

東京音楽大学附属民族 音楽研究所研究紀要 Vol.5

直川礼緒 2017 『日比谷カレッジ世界の音楽 2017～2018 口琴の響き、その歴史』 レジュメ

直川礼緒 2017 「アジアの出土口琴 日本とその周辺」 音楽考古学研究会レジュメ

直川礼緒 2017 「アジアの発掘口琴チェックリスト（3）：薄板状の口琴（3）と湾曲状の口琴（1）」『伝統と創造』

東京音楽大学附属民族音楽研究所研究紀要 Vol.7

平野雅之 1988 『花山遺跡』 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第38集

福田 聖 2016 『屋敷裏遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第422集

山形洋一・渡辺正人 1993 「埼玉県大宮市氷川神社東遺跡の口琴」『口琴ジャーナル』No.6

山田光洋 1998 『楽器の考古学』「ものが語る歴史1」同成社

渡辺清志 2018 「最古の口琴をめぐる諸問題」 平成29年度ほるたま考古学セミナー『国境の集落』 レジュメ

枠は振動を受け止める部分であるため、弁と共に振しない程度の質量を必要とする。

**B:枠の一部が2本平行してまっすぐに伸びる「腕部」を形成していること**

振動弁が残存していれば、この2本の腕の隙間に位置することになる。

**C:腕部の断面は正方形で、かつ対角線を水平方向に向ける形に成形されていること**

やや回りくどい表現だが、第1図の《横断面》を参照されたい。特に演奏に直接関わる腕部先端ではこの構造が必須となる。

なお、遺物の時期についてはこれまでの4例が平安時代のものであり、同時期の資料の追加が期待されるが、断片的ながら文献資料に口琴が登場する近世の遺跡からの出土品についても注意されたい（可児 1965）。

#### 謝辞

本稿を作成するに当たっては木更津市教育委員会の多大なご理解とご協力をいただきました。また、遺物の観察と分析にあたっては日本口琴協会会長であり優れた口琴奏者である直川礼緒氏の地道かつ国際的な研究に多くを負っていることを末筆ながら記し、深くお礼申し上げます。